

# グランブルーファンタジー Second Life

崋眼翔

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一度人生を終えた

二度目はどうなる

広大な空で一つの出会いが物語の始まり

さあ、君もどうだい？

空の世界に

# 目次

切っ掛け	1
思い、それは色々な可能性が潜むモノ (上)	8

## 切っ掛け

ルリア

空が青く風が撫でるように吹き、ファータ・グランデに位置するザンクティンゼル。そこに小さな村が存在して道の柵に腰掛ける少女が一人。

彼女は小柄な体系で、透き通るような綺麗な水色の長い髪に胸や腕に金の装飾を纏い白いワンピースを着ている。

誰かを待っているのか腰掛けた柵の上で足をブラブラさせていると、村の子供が彼女に話しかけてきた。

えっ、私とグランの事についてですか？　…うーん、最初は帝国軍からカタリナと一緒に逃げてこのザンクティンゼルで会いました。

その時は…失礼ですけど、不思議な男の子だと思いました。やっぱりグランぐらいの男の子って感情が表に出るのが当たり前なのに…。無表情が基本で余り口も開かない。代わりにビイさんが通訳してもらってましたが、長く旅をして行く内にグランが言いたい事が理解出来る様になりました。

あっ、やっぱりそうなんですネ。　グランは無表情で無口ですが、人に親切で優しく…何処か怖がってる。　ですけど、団員さん達はそんなグランが大好きなんです。

!?!　わ、私は…はいい。　す…好きですよ？　船の中ではハーヴェインみたいな姿も可愛らしくて、戦ってる姿も。　いつまでも守られるだけではなくグランの為に頑張っていきたいです。

あ、グラン。　すみませんがお話はこれまでで。　また機会があればザンクティンゼルに来た時にグランと旅したお話ししますね。

グラン！　ビイさん！



私は幼い頃の記憶がありません。気がついた時には暗く狭くてカビ臭い牢屋の中にいました。それからエステル帝国が私の持つ力を求めて色々な事をさせられました。

星の民の遺産と言われた星晶を使って星晶獣から力を借りる事が私には出来ず。ですが星晶獣にも命があつて感情があります。なので無理矢理に召喚をすれば負担が凄くて星晶獣が苦しんでいます。エステル帝国はそんな事をお構い無しに私を使って研究しているらしいです。

そんな環境が嫌で牢屋の中で涙を流していると、エステル帝国軍であるカタリナが私を牢屋から出して一緒にエステル帝国から逃げました。逃げる際ザンクティンゼルに足をつけましたが、エステル帝国からの追手は早かった。森の中で帝国軍から逃げてる際に一人の男の子とぶつかつてしまいましたが、それが運命の出会いだと思えました。

少し私と変わらない身長の子を見てから焦つていた私は思わず助けを求めてしまいました。しかし、彼は無表情で無口の為に返事が返ってきません。そんな彼の後ろからオレンジ色の小さな竜が飛んできました。小さな竜のビイさん曰くは彼の名はグランと教えて貰いました。

彼は幼い頃から感情を表に出さず口も余り開く事が無いそうです。だから殆どがビイさんが通訳して会話をしてるそうです。そんな会話をしていると私の後ろから軍人が追い付いてしまった。軍人はグランに抵抗するなど命令してきましたが、グランは無視して腰に装備していた剣を鞘から抜きました。

一言も喋らないグランにイラついたのか、一人の軍人がグランに襲いかかりました。振り上げた剣をグランに斬りかかりますが、彼は

半歩左足を引き半身になり斬撃を避けました。すると下げた足を軍人の鎧がない左太腿を蹴りました。

バツシイ

凄い音を鳴らして痛みに悶えた軍人に、本来の使い方とは遠い形で剣の横でフルスイングで軍人の頭を振り抜きました。

ガキーン

私とそんな変わらない身長なのに凄い力持ちなのか、兜は凹んでしまい軍人は倒れました。残り二人も難なく持っている剣では斬ることなく倒してしまった。 凄い。

グランが軍人を倒すとカタリナが駆けつけてくれました。私にとつては姉のような存在で茶色の長い髪に美人で鎧を身に纏い、とても強いカタリナ。カタリナがグランに私を救った事をお礼を言う、確かポンメルンさんって言う人が怒鳴って近づいてきました。カタリナは渋い顔をしながら、ポンメルンさんと話し合っていました。それは私の力について。私には何故この力をもっているのか、何処から来たのかもわからない。そんな事を考えていると、身体に悪寒が走ります。

これは無理に星晶獣を召喚した時の感覚。あれは大きな力を持つ星晶獣、それをグランに戦わせるのは危険だと思い逃げるように言いました。そして星晶獣から流れてくる嫌な感じが私の心を締め付ける。私に止める力が無いからあの子は苦しんでいると思うと、涙が止まりませんでした。グランの背に寄りかかるように鳴いていると突如グランは振り返った。

すると、グランは私の両肩に手を置くと：彼は小さく微笑みました。 ビイさん曰く私は化物では無い：可愛い女の子だと。初めてグランの表情と言葉に先程の嫌な感じが少しずつ溶けていった。

そして彼は星晶獣『ヒドラ』に剣を向けると、グランは身体を震わせていた。あれは私にはわかる、恐怖からくる震えだと。それを見たポンメルンさんは笑い始めました。子供の分際や悪口を吐き散らすポンメルンさんですが、いきなりグランは吠えました。

嗚呼あああああああつ!!

何処か自分を奮い立たせる為に大きな相手からの恐怖を消し飛ばす咆哮。 凄い声量で叫んだ所為か私含め全員が耳に手で塞ぐほど。そして、グランはヒドラに向かって走っていきます。 それを向かい打つヒドラは大きな身体である5本の首をグランに襲いかかります。

鮮やかに躲してはヒドラの首に乗って、動体に目掛けて剣で攻撃していく。 しかしグランの攻撃は鱗の所為か傷すら付きませんでした。 それを見たポンメルンさんは笑っていましたが、グランは動体に到着すると首からの攻撃を待っているように構えていました。

ヒドラがグランに目掛けて首を突っ込ませると、剣を鱗を剥がすように差し込むとその場から避難。

すると、ヒドラは攻撃が止めれずそのまま自身の動体に攻撃する羽目に。

グオオオオオオオオオ

本来であれば一人一人の力では剣でヒドラに傷を付けるのは困難でしょう。 グランは逆手をとって鱗の隙間に刺した剣をヒドラの力を使い傷を負わせました。 刃は体内に差し込まれ、ヒドラは傷の痛みに暴れます。 グランは再び刺さった剣の場所まで戻ってきては、剣を抜かず横に移動させて裂き続けようと思いました。

暴れるヒドラの上でグランは反動を利用して、ヒドラの身体に傷を大きくしていく。 私はもしかしたら倒してしまうのではと思いましたが。 ですが余りにも凄く暴れるヒドラにグランは遂に剣から手を離してしまつた。 宙に舞うグランを見たヒドラは、首を横に大きく振りグランを吹き飛ばす。

ドゴオ!

グランはこの地の祠に叩きつけられました。 崩れる祠に横たわるグランは、血塗れでピクリともしていなかった。 私の所為でグランは死んでしまうと思うと彼に駆けつけました。 心の底から彼を死なせては駄目だと思い、私はこの身に司る力を使って彼を助ける。

私の力：貴方に預けます！

私の命をグランに流し込めると：本当だったら半分は渡すつもりでしたが、四分の一しか入りませんでした。

だけどグランの傷は完全に塞がり、閉じていた目は開いてくれた。  
：何処かグランの中に入った時は変な感じでしたが、そんな事よりヒドラです。

私の身体に溢れそうな力が祠から伝わってくる。それを制御しようとする。グランは私の左手を右手で優しく包み込む。突然の事に驚いてグランの顔を見ると微笑みの表情。何故か彼の言いたい事が伝わる感じが…。

ドクン

もう星晶を伝え：あの子を呼び出す！

「始原の竜——闇の炎の子」

私とグランと一緒に詠唱を始める。

「汝の名は——プロトバハムート!!」

星晶から顕現された星晶獣はとてつもなく大きく翼で飛翔し黒くその身に力を押さえ込んでいるのか、顔には口を拘束されていた。

私に力を貸してほしい。お願い。ヒドラを救って！

グググ…グ…

ブチ…ブチブチチ

すると星晶獣は私の思いが通じたのか、拘束されていた物が弾け飛ぶ。

オオオオオオオオ

抑える物も無くなり星晶獣は叫び、私には感じていた力は今：放たれる！

大いなる破局

星晶獣から放たれた一撃はヒドラに向けられた。

お願い…プロトバハムート。どうか、あの子を——魔晶の力から解き放って!!!

凄まじい暴力はヒドラを包む。そしてヒドラは黒く焼け焦げる。

私はもうヒドラは開放された事が分かり星晶獣にお礼を言う。

ポンメルンさんはヒドラが動き始めると、再び命令する。しかし、縛る物が無くなったヒドラはポンメルンさんを襲いかかっている。それを機にカタリナは逃げる事を提案する。

あの場から遠く離れて一休みをしていると、カタリナはグランの傷に関して質問し始める。それについては私が言わなければならぬ。私の力を使って本来命を落とす筈のグランは、私自身の命とリンクさせた。

本当だったら半分渡すつもりが四分の一とは言え、どちらが死ぬ事あれば……。そんな不便な身体にさせた事を頭を下げ謝った。だけど、グランは優しく私の肩に左手を乗せる。恐る恐るグランの方を見ると笑っていた。

ありがとう

この一言で私はこの人に力を使った事は間違っていないと確信する。そして感覚的に余りにも距離が私とグランで離れるとお互い命を落としてしまう可能性が。それを伝えるとカタリナはグランと一緒に来てほしいとお願いする。

するとグランの表情は少し驚いた様子。そこにベイさんは、お父さんとお姉さんに会いに行く理由にもなるだろうと。ベイさんの言葉にグランは頷き一緒に旅に出る事に。

グランのお姉さん……。どんな人だろう。気になりますが、そんな事よりカタリナが用意していた小型艇に乗って次の島に移動しなくては。

これが私とグランの出会いであり……。大きくなる物語。

遙か広がる空の向こうに私達を待っているのは…

思い、それは色んな可能性が潜むモノ (上)

思い、それは色んな可能性が潜むモノ (上)

ヴェーラ・リリーエ

グランサイファーの一室で女性が一人、ノートの上にペンを走らせて文字を書き込んでいく。紅い瞳に腰まで流れるように美しい金髪で端正な顔つき。髪型は後頭部に赤と黒のリボンで結びポニーテール。すらりと伸びた手足でスタイルが良く、胸部や臀部が大きく過ぎず小さくない完璧に近い容姿を持っていた。服装は特殊で白いスカートに赤のビスチェで少し露出が高い。

日記を書き続けてキリが良い所で、ペンをテーブルに置いて凝り固まった身体を伸ばす。ポキポキと鳴り響き、日記に書き残していた事を見直していく。

グランと会うまでは城砦都市アルビオンで領主をやっていました。

父は島の大半を牛耳していた豪商ですが下級貴族でした。そんな家庭に私は生まれ、幼いながら私は才能に恵まれていて勉強、剣術、美術など様々な面で家族である兄達を上回っていました。

そんな私は父の跡を継ぐに値する人間だと思っていました。父は私を継がせる気は無く今まで身に付けたものが無駄にしたいくない為に城砦都市のアルビオンにある士官学校に入学。

私は明確な目標もない為に、軍に入って騎士として空の世界で自分の能力がどこまで通用するのか試みました。しかし、私は余りにも他の人間より高い位置にいる所為か私の実力を発揮できる存在は士官学校には居らず…競う事も無く楽しみが無く只々時間が過ぎるだ

けに絶望しました。

そんな生活の中で、後で知りましたがアルビオンでは鍛錬を称して常に街中に魔物を放たられていた事に。私はそんな事を知らずに街中で魔物と交戦して、恥ずかしながら不覚をとってしまい窮地の中で運命の出会いをしました。

それがカタリナ・アリゼ、私のお姉様です。

助けてもらった日から私はお姉様と付きつきりで学校生活を楽しんでいました。お姉様は私にとっては光でした。暗く面白みも無く過ごすだけの学校に、私と同等かそれ以上の強さをお持ちでしたから楽しくて仕方ないほどに。だけど、多彩なお姉様は一つだけ欠点がありました。

それは料理でした。

お姉様が作っていたいた物は残さず、私の身体の一部として蓄えたかったのですが…命落とす気持ちで食さなければいけません。

本来、その料理の工程をなぞれば完成する筈がお姉様の手には掛かれれば言いつらいですが未知の食べ物に変化する。これには私もお姉様への愛でも完食するには命が惜しい。

ですが、そんなお姉様も素敵。お姉様のお陰で私は自然と笑えるようになったのだから。

そんな楽しかったお姉様との学校生活にも終わりが近づいていた。

アルビオン領主は世襲制ではなく実力で決める掟があり、私は前領主が亡くなられた際に武術大会で当然ながら優勝を勝ち取り在学中でしたが16歳でアルビオン領主になりました。

ですが、本来ならお姉様が領主になっていたのも不思議では無かったです。その頃は私の実力ではお姉様には敵わない筈が…アルビオンの守護する騎士たる星晶獣の《シユヴァリエ》との契約を嫌いました。一度《シユヴァリエ》と契約を結んでしまうと、生涯アルビオンから離れる事は出来なくなってしまう。

その為にお姉様は武術大会では力を抑え、私に勝利を譲りました。そんなお姉様のお考えを察した私は受け入れて、《シユヴァリエ》と

契約をしましたが：お姉様はアルビオンの地から離れてしまいました。

その時はお姉様に私の生涯を捧げるに値する人だと思っていたのに、それが私の前から幻のように消えてしまった。私はお姉様を追いかける事をしたいと思いましたが、《シユヴァリエ》の呪縛によりアルビオンから離れる事は出来ず心に大きな傷跡を残す事に。

それから4年が過ぎ、アルビオンにある人間が訪れた。

騎空艇が一隻、《ドラゴンスプリット号》がアルビオンに定着する。私はその時は領主の仕事がひと段落して、街中を歩きアルビオンの様子を眺めていると一匹の魔物が現れました。いつもの作業のようには剣を抜き討伐しようとしたが：私に襲い掛かる魔物は1本の線を描くと真つ二つになっていました。

「大丈夫ですか？」

それがジータとの出会い。彼女はショートヘアーの金髪でピンクのカチューシャをして、上が白で下がピンクな変わったワンピースを着ていました。華蓮で可愛らしく、魔物を討伐して剣を収めるまでが何処か芸術のように美しかった。

お姉様とは違いますが、彼女は人を引き寄せる何かを持っているのを感じました。：私はお姉様と言うものがありながら、彼女に惹かれる自分が憎かった。

しかし、一人でも討伐できた魔物でしたが彼女には助けてもらったのは事実だったのでお礼に城に案内してお茶を一杯。

「へえ、ヴィーラさんはアルビオンの領主をやっているのね」

「ええ」

「あれ？もしかして私余計な事したかな？ 領主って事は実力も持ってるよね」

「そうですね。しかし、ジータさんの戦う姿は華蓮でしたので良いもの見れて満足です」

「えへへ：照れるなあ」

可愛らしく笑うジータに見惚れてしまう私。やはり彼女は無自覚ながら人を引き寄せる力を持っている。

「ジータさんはどちらから来られたのですか？」

「私？ ザンクティンゼルからだよ。 田舎島だけだ」

「…そこにジータさんの先生がおられるのですね？ あの太刀筋を見れば相当の実力をお持ちで」

私の言葉にキョトンとしたジータ。 手をヒラヒラと振り笑いはじめ。

「いやいや、あそこには唯の田舎だったから。 少しお婆ちゃんから教わってからは私の独学で身につけた実力だよ」

私は身体に電流が走りました。 自分ながら才能に恵まれていたのは理解していたが、彼女は天性の才能の持ち主であろう。

百の努力をして一を手にして凡人。

一から一を手にして秀才。

そして一から十や百を手にすれば天才。

そんな彼女の實力を知りたい欲求が湧き上がる自分。 私は天才と言えるであろうジータにどこまで通用するのかわ。

「ジータさん、良ければ一つお願いしたい事が…」

場所は変わって、武術大会で使われた場所でジータと手合わせする事に。

「ありがとうございます。 ジータさん、私の我儘に付き合ってもらって」

「良いよ良いよ、私もヴィーラさんの實力を知りたかったし」

ジータは準備体操をしながら答える。 実際には確実にお姉様より格上の相手。 しかし、自分がジータに何処まで食いつけるかが知りたかった。 …お姉様が居なくなつた後も腕を錆びぬよう修練はしていたので。

「よっし、始めようか」

「ええ、合図は私が持つ鞆が上に投げて落ちたタイミングで」  
「了解」

上に投げられた私の鞆は、クルクルと回り地面に落ちる。

その瞬間、私はジータに向かって走り距離を詰めて剣を振るう。

しかし、事も簡単に剣で受け止められてしまう。私が培った技術を全て出しても勝てないのは理解している。だからこそ私の全てを受け止めてほしい。今までがお姉様しか私を受け止めれる人間がいなかったのだから。

「ふっ、はっ、やっ」

「ほっ、ほっ、ほっ」

悉く簡単に私の攻撃を受ける。力でやろうが技でやろうが彼女には届かない。仕舞いには彼女は攻撃にすらしていないのだから。

だけどジータには慢心は無く、私の攻撃を受けていたが少しずつ躲し始める。受ける事なく躲し始めていると、ジータは私が攻撃をしている中で手を出し始めた。

私の隙になる場所を指すように、その場所に剣を向けてくる。当てる事なくギリギリの所を止めて私に教えるように。それを無くすように動けば、私はより一層に動きにキレが増した。何故だろう：彼女との手合わせが稽古に変わり始めている事に気づくのが遅かったのは。

彼女と手合わせすると私の悪い所が削ぎ落とされ、動きに洗練されていく中で自分の実力が彼女に引き込まれていくのが楽しく思える。

逃すな、今を…!! 私を引き上げていく貴女を…!!

無意識なのか私は自然と笑っている。領主になったあの日から作り笑いを覚え、心から笑う時は無かった筈が今は自然と笑えた。

もつと…もつと…貴女はまだ行ける。

実際には声は出ていないが彼女から聞こえる声が私に届いていた。ええ、そうですね…まだ…まだ先に。

もう時間がどれだけ流れたのかは知らないが、私の体力は底をつきそうになっていた。だけど貪欲になった私は最後の一滴まで絞り出そうと決めた。

全部を…

「見せて／見せる

「その時、彼女と私の思いは一つになったのを感じた。

キイン

私の渾身の突きは、剣の切っ先で見事受けるジータ。本当に力尽きてしまいその場で座り込んでしまった私に、ジータは見下ろす様に立ち満面の笑みを浮かべていた。

「頑張ったね、ヴィーラさん。一つ強くなったよ」

その日以来、ジータと稽古やお喋りなどお姉様の時を思い出させる生活が続いた。

彼女の仲間達も実力者が多かったが、やはり団長としての座を君臨しているだけの事あってかジータより下であった。楽しい時間もあつという間に過ぎる中でジータの故郷の話が持ち上がった。

「私ね、弟がいるの。グランって名前んだけど…正直な話、変わった子だと思うの。常に無表情で何考えてるのか家族ながら分からないんだよね」

彼女は懐かしそうに故郷の話をしてる中、家族の弟の話題に変わっていった。

最初の方では、弟のグランが変わり者だとジータが話していくが少しずつジータは声が沈んでいく。

「グランってね…幼い頃から表情を表に出さないから島の人間から不気味がられていたんだ。普通なら笑って泣いてが当たり前なのに、他の子供とも余り関わらない子なの。ただ大人しい子ならまだ理解出来るんだけど…まあ親は私達を島に残して何処かに旅をする変わり者だけだね。」

私も余り親に対して思う事が無かったから、グランと育ての親であるお婆ちゃんがいたから寂しくなかったんだ。だけど…グランは親に対してが無関心らしくて、変わりに姉の私にはベツタリだった

なあ。

島の人達からは奇異な目で見られてるけど、私はやっぱり弟であるグラんが可愛く感じるだよね。

あのねあのね、グラんって無表情だけだと思ったら違って私が日向ぼっこしてる時なんか横に座ったら寄りかかってくるの！ その時なんかホニヤって言えばいいのかな？ 私に身を任せて寝ようとする顔なんか見たら愛が溢れそうになるんだよね!!」

先程の落ち込むような空気が一変、熱く弟の自慢話が始まってしまった。：何処か鼻息を荒くしながら。

「私が島の人から甘いお菓子貰ってきた時なんか、私が一緒に食べようと誘ったんだけど最初は断られたんだ。その時はまだ心の距離があるのかなあと思ってたんだけど、グラんったらチラチラとお菓子をてるんだよね！ なんか興味なんか無いよって強がっていながら本当は食べてみたい感じが本当に可愛くてね。結果グラんを捕まえて一緒に食べたんだ。食べる迄は無表情なんだけど、お菓子を口に入れた瞬間なんかムフって感じで顔がトロけるんだあ：思いついても可愛い！」

私は何処か楽しそうに話すジータを見てみると、心の奥からジワジワと悪い感情が溢れてくるのが分かる。

「だけどね…そんな弟に、唯一負けてる所があるんだ。非常さつて所で。」

一緒に稽古しても大抵私が勝つんだけど、グラんって負けず嫌いなのか体力が尽きるまで続けようとするの。最初は付き合ってたんだけどね、グラんが体力作りしていく内にやりにくくなっていくの。

まあ、私が負ける事はなかったんだけど。

で、ある日にね…島が襲われたの。ならず者達がザンクティンゼルに襲ってきて、島の人達が蹂躪されそうだった。最初は私が蹴散らそうとしたんだけど…ならず者達の圧に負けて私は動けなくなつたんだよね」

ジータはその時の光景を思い出しているのか、身体を抱きしめるように両手で震えを抑えようとしていた。私は一瞬、最悪の事態に

なって彼女はトラウマを負ってしまったんだと思った。

「私ね：腰を抜かしているとならず者達が下卑た顔で私に近寄ってくるの。実力なら全然私の方が強い筈なのに、実戦も知らない小娘だったから何も出来なかった。もう駄目だと思っただけならず者が手を伸ばしてきて目を瞑っちゃうんだ。」

その後、ならず者の悲鳴が聞こえたんだよ。余りのことに驚いて目を開けると、グランの小さい背中があったの。

グランが家にあつたナイフで、私を触ろうとしたならず者の指を切り落として血を頭から被って助けてくれたの。その後、数人のならず者達がグランに襲いかかって戦闘が始まったの」

カチャ

ジータは紅茶を一口飲むとカップを置いた。

「それからは血と血で争う闘いだだった。その時グランって9歳で島の他の子より小柄だったから大人であるならず者達からは、狙いが定まり辛かったのか困難してたよ。ちよこちよこ走り回るグランに、翻弄されては下半身を切りられて悪戦苦闘してたなあ。」

「けどならず者達も馬鹿じゃなかったから、数でグランを襲いかかっていったの。何とか致命傷を貰う事は無かったけど、ジリジリと追い込まれて一人のドラフに体勢を崩したグランを蹴り込まれたんだ。」

「大人のドラフって力強いでしょ？ その所為か子供で軽いグランは、飛んで行っちゃったんだよね。その時木に後頭部を打ち付けて、頭から血を流して横たわった姿を見た時は：死んじやったと思っただよ」

「その時の光景を思い出しているのか、ジータの顔色は益々青くなっているよ。」

「邪魔物が居なくなつて気を良くしたならず者が私の髪を掴んで見せしめなんだろうね。止めを刺そうとして、グランに近寄って斧を頭に振り落とそうとした時：私って叫んじやったんだ。」

「だけど：聞こえたんだ不思議な音が。」

カチリって」

一息つく為に深呼吸して、下がっていた頭が上げてジータは疲れた顔になりながらも話し続ける。

「そこからは…後にグラン本人に聞いても分からない仕舞いだっけど凄かったんだ。 グランを狙いつけた振り下ろされた斧は、目標に当たらず地面を叩いた。 やっぱり弟が悲惨な姿を見たくなかったから目を瞑ってんだけど、ならず者達の反応がおかしかったから目を開けると斧を持ったならず者の横にグランが立っていたの。」

頭から血を流して表情が見えないグランにならず者達は不気味だったんだろうね。 大勢で襲いかかかっていくんだけど、グランの動きが変わった動きで躲していくのと同時に落ちていた剣を拾っててね。

ヴィーラさんなら分かってくれると思うんだけど、剣って叩きつけるか突くのが普通でしょ？ それなのに、あの時のグランって変わった切り方してたんだ。 ならず者の攻撃を躲していくと横にすれ違う瞬間、剣の根本を相手に添えると…玩具のコマみたいに自分の身体を高速回転させたの。

するとね…質の決して良いとは言えない剣で、人の身体を真つ二つに。 余りの事に私もそうだけど、ならず者達も唾然としてただよね。 嘔き出る血を浴びながら振り返るグランの姿は異形だった。

その後はならず者達もグランの姿には恐怖を感じたんだろね、恥も忘れて逃亡を図るんだけど…そこからは虐殺が始まるの。

逃亡する者を追いかけては背後から断頭。

命乞いする者は頭をかち割り。

生き延びようと抵抗する者は四肢を切られてから心臓を一突き。

血が舞う光景には、一人の9歳の子供が起こしたとは思えなかった。 でも、そのお陰で村は救われたんだ。

(…小さな身体で私には無い非常さ。 それなのに私にはならず者達を近寄らせない後ろ姿…家族なのに思っちゃいけない思いが胸の奥

から込み上げるのは表には出せないなあ」

そんな弟の話をして、当時のジータは自分がどれだけ浅はかな考えでいたのかを痛感したらしい。それから3年後には島から離れ、独自で仲間を集め団を立ち上げ旅を続けている。それから1年で、あそこ迄の仲間達を率いる団長になったと考えると…やはりジータとしてのポテンシャルは高いと言えるだろう。

弟の話をしてから三日後にジータはアルビオンの地から旅立っていった。

その2年後に、ジータの弟であるグランがお姉様と一緒にアルビオンの地に足をつけるとは当時の私には思ってもいなかった。